

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



「日本を救おう！」放射線測定器、ウクライナから ついに到着!!

東電福島第一原子力発電所の重大事故から9日後の3月20日、キエフ駐在の竹内さんに電話を入れた。「放射線測定器を100台ほど入手したい!」。日本での入手が極めて困難であることが判り、私達は、ウクライナに頼った。

あの日(3月11日)を境として、事務局には福島の前地から問い合わせが殺到した。とりわけ、放射能被害に見舞われた地域の人々の電話からは、痛いほどに切迫した思いが伝わってくる。被曝を余儀なくされている人々が、正確な汚染情報を得、少しでも被曝を軽減するためには、測定器は必須であった。なんとしても、早く測定器がほしい!!

一方、「ホステージ基金」は、3月22日「ジトーミル州新聞」に「ウクライナから日本へ放射能測定器を贈ろう!!」というキャンペーン開始の記事を掲載した。その記事を見たチェルノブイリの被災者たちから、たくさんの支援金が寄せられた。(前124号P6~12参照) あとは、測定器を待つばかり。

…が、事はなかなか進まない。日本政府や商社からの注文・買い付けが相次ぎ、在庫がないとの情報。しかし私達は、各方面に手を回しつつも、ウクライナから届く測定器を待ちわびていた。そして、話が進展したのは、9月を目前にしてからだった。この時点でも、「本当に届くのだろうか?」という、一抹の不安は消えなかったが、そんなことは言っていられない。ともかく、入手のために最善を尽くす。

遂に、9月21日、中部国際空港の税関より手続き関連の連絡が入り、手続き完了後の23日、待ちに待った放射線測定器 TERRA-P MKS-05 (ECOTEST社・ガイガーミュラー計数式)は、無事事務所に届いた。これから、福島被災地に住む人々の被曝軽減のため、フル活用していきたい。(山盛 三千枝)



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

ヒマワリ栽培による放射能汚染土壌の浄化は可能か？

----- 土壌浄化に対する救援・中部の見解 -----

池田 光司

放射能汚染地におけるヒマワリ栽培については、福島原発事故発生後に報道機関が土壌浄化の有効な手段として報道したこともあり、イメージ先行の形で汚染地にヒマワリを植える活動が広がりました。一部の報道機関では、チェルノブイリ救援・中部がヒマワリ栽培を推奨しているかのような報道もされてきました。そこで、このまま放っておいては、地元の方々が土壌浄化を考えるにあたり、混乱を助長するのではないかとの危惧を抱き、8月17日付けでチェルノブイリ救援・中部としての土壌浄化に対する見解をホームページに掲載しました。紙面の都合上、見解のうちヒマワリ栽培に関する部分を要約して掲載します。なお、表土剥離、植物による放射能吸収（バイオレメディエーション）、菜の花プロジェクトについても述べた見解の全文はチェルノブイリ救援のホームページに掲載されていますので、ぜひご覧ください。この見解が、土壌浄化を考える方々のお役に立てば幸いです。

9月に入り、さまざまな機関や団体のヒマワリ栽培の結果が出始めていますが、「効果がない」とする結果、「いや効果がある」とする結果、双方の結果があり、まだまだ混乱が続く感があります。チェルノブイリ救としては、公表される結果などを精査しながら、土壌浄化に対する考え方をさらにしっかりしたものにしていくつもりです。

<ヒマワリ栽培による土壌浄化に対する見解（要約）>

1) 土を掘り起こすことの問題

現在、福島原発事故による土壌の放射能汚染のほとんどは、表面数 cm の土に固着した放射性セシウム（放射線を出す Cs134、Cs137）によるものです。したがって、ヒマワリを植える際に土を掘り起こしてしまうと、表面付近の放射性セシウムを、深さ 10~20cm のところまで混ぜ込んでしまうこととなります。汚染された土が表面数 cm であれば、取り除ける可能性もありますが、数 10cm になってしまうと、表土剥離で汚染土壌を取り除くことは不可能になります。

2) ヒマワリの土壌中の放射能吸収能力に対する疑問

ヒマワリが、表層数 cm の部分に上手く根を張るとは限らないこと、そして、吸い上げられる放射性セシウムは土壌中の水分に含まれる分のみで、土に固着したものは難しいことから、土壌浄化は容易でないと考えられます。「土壌中の放射性セシウムを効率よく吸い上げた」という報告は耳にしません。菜の花プロジェクトにおいても、菜の花が 1 年間に吸い上げる放射能は、土壌中の数%にすぎません（それでも農地利用に対しては効果があります）。その菜の花よりもヒマワリの方が、土壌中の放射能を吸い上げる能力が低いという報告もあります。

3) バイオマス（種・葉・茎・根など）の処分に対する懸念

バイオマスを放射能で汚染されたものとして処分する場合、ヒマワリは大きく育つので、バイオマスの量がとても多く、その処分が大きな問題となります。ヒマワリにはリグニン（木質成分）が多く含まれ、メタン菌の発酵（バイオガス生成）を阻害するため、発酵分解による減容は難しく、また焼却処分は、セシウムの再飛散やセシウムが濃縮された後の灰の処理という、新たな問題を引き起こします。

以上のようなことから、ヒマワリについては、まだまだ検討されなくてはいけない点も多く、チェルノブイリ救援・中部としては推奨できません。

私たちは「命めぐる大地」がよみがえることを信じ、チェルノブイリ原発事故で汚染された土地で「菜の花プロジェクト」を進めてきました。対策は異なるかもしれませんが、今、同じ思いで、福島原発事故で汚染された土地の再生にも、向き合っていこうと考えています。

「市民放射能測定センター(C-ラボ)」 がオープンしました!!

9月25日(日)午後、「未来につなげる・東海ネット」(チェル救も呼びかけ団体)が、西区に市民放射能測定センター(通称C-ラボ)を正式にオープンさせました。「東海ネット」のメンバー・放射能測定の専門家大沼章子さんが、測定ボランティアの養成講座を開講し、測定器の当面の設置場所である(株)名古屋生活クラブのスタッフの協力で、実際に食品等の検体の測定練習を繰り返し、準備期間を経て、正式に開所に至りました。

当日は、最初に開所の記者会見があり、その後C-ラボ運営委員の大沼淳一さんによる測定器の説明や放射能の自主基準の提案があり、測定器を見学したり、参加者40名ほどが茶話会で原発事故被害や放射能汚染などについて語り合い、交流しました。

C-ラボの主たる測定装置は、食品放射能測定システム(アロカメディカル社)、NaI(Tl)シンチレーション検出器で、野菜や飲料、土壌も測定できます。

測定可能な核種はヨウ素131、セシウム134、セシウム137で、検出限界は検出限界各5ベクレル/キログラム(Bq/Kg)程度(測定時間により検出限界が変わる)です。測定料金は、検出限界5Bq/Kgが4,000円、10Bq/Kgが2,000円で、市民が気軽に利用できるように一般に比べて格安に設定されました(測定器購入には、高木仁三郎科学基金から一部助成を受けました。引続きカンパを募っています)。

国の食品中放射能暫定基準は、福島事故後に急遽決められた(2011年3月17日策定)もので、本来「放射能はどこまでなら安全という閾値(しきいち)がない」(低い値でもそれなりの影響がある)という観点からみて問題であり、とても高い基準値です。例えば、放射性セシウムが、飲料水1ℓあたり200ベクレル、牛乳・乳製品1Kgあたり200ベクレル、野菜・肉・魚等その他の食品が500ベクレルで、ウクライナの現在の基準値を大きく上回っています。

福島県から関東圏まで、広範囲に放射能汚染は広がっており、その中で生活しなければならない現地の人々を始め、日本国民全体が、これから食品・土壌・焼却場汚泥などの放射能汚染と、否応なく向き合いながら生きていくこととなります。

C-ラボでは、毎日の生活の中で放射能を体内に取り込むことによる内部被曝をできる限り避けながら、特に子ども達・若い世代をどう守っていくのか、農業・漁業など生産者をどう支えていくのかを、皆さんと一緒に議論していきたいと考えています。

「未来につなげる・東海ネット」からお知らせ

日時:11月13日(日)14:00~17:30

入場料:1,000円(予約不要)

定員:450人

場所:東別院ホール(地下鉄名城線「東別院」駅下車)

講演会:木村真三+河田昌東

「放射能汚染時代を生き抜くために チェルノブイリから福島へ」



C-ラボへのお問合せ:

〒452-0802 名古屋氏西区比良2-120 (株)名古屋生活クラブ 気付

Tel:052-501-0251 (平日9:00~18:00) Fax:052-503-0967

<http://tokainet.wordpress.com/hsc> tnet_sokutei@ray.ocn.ne.jp

「放射能除去装置」を作るため、今ウクライナに来ています！

(原 富男)

9月21日に日本を発って今、ウクライナのナロジチ地区ラスキ村にいます。出発時には、台風15号が名古屋空港に最接近し、飛行機が無事飛ぶかどうか心配したのですが、他の便が欠航する中、絶妙なタイミングで出発することができました。今回の主な目的は、「菜の花プロジェクト」の中でも肝心な部分である「放射能除去装置」作りです。



菜の花プロジェクトは、① 栽培、② 搾油、③ BDF（バイオディーゼル燃料）製造、④ バイオガス発生、⑤ 放射能浄化（分離・保管）の5つからなりますが、今回の工事は、⑤の部分にあたります。

これに加え、雷で④の管理棟（貨車）が火事で焼失したため、この復旧工事も行います。また夏場には、予想の2倍以上のガスが発生することがわかったため、実験も兼ねて、敷地内のカベツキー農場の畜舎・洗い場で、バイオガスによるお湯を使えるようにするために、発酵槽から200mのガス管を延長する予定です。

22日に、バイオガス装置のあるナロジチ地区ラスキ村に到着しました。火災にあった貨車は、残骸が全て外に出され無残なものです（右上の写真参照）。しかし、貨車内部以外のバイオガス発酵装置や、牛の侵入を防ぐ木柵、原料保管小屋などは、無傷で残っていたので安心しました。内装工事は、事前に地元業者に工事依頼済みで、火を使う部分以外は無垢の板張りに仕上げられており、外壁の塗装工事を終えれば建物関係は完成となります。

今回の工事は、私と竹内さんの2名だけで、約一ヶ月かけて行う予定です。私たちが工事を始めるに当たり困ったことは、貨車内に保管してあった工事に使う工具や材料が、燃えてしまっていることでした。ペンチ一つない状況から、以前と同じ工事をしなければならないのは気の重いものです。いざ始めようにも手が付かない状態です。気を取り直して、車で20分ほどの所にあるオブルチという街まで、工具や材料を買い出しに行き、隣町のナロジチ消防署に預けてある電動工具を取りに行き、ようやく工事開始となりました。

25日時点で、貨車内の配管工事は9割終えることができました。しかし、問題はいくつもあります。その一つは脱硫装置です。直径20cm長さ1.2m程の塩ビ管で作るのですが、その材料がウクライナにあるのかどうか心配です。また、延長200mのパイプがあるのかも、調べなくてはなりません。

心配なことは、深さ50cm長さ200mの掘削です。日本ならば、バックホーという重機をリースで借りることもできるのですが、ウクライナでは都会にしかないのではと心配しています。また、今回の工事で一番大事な「放射能除去装置」は、ゼオライトで放射性物質を吸着するため、簡単に取替えができるように、プラスチック製で、高さ30cm×幅30cm×奥行き110cmという設計です。しかし、ウクライナに指定寸法の箱があるとは限りませんので、日本からこの半分の寸法どおりの箱を2個持ってきました。これを連結させて、指定寸法の浄化装置とする予定です。



ゆっくりと放射性物質入りの廃液が流れるように、堰き止め板を12枚入れる予定で、貨車の中で暇を見ては竹内さんに作って貰っています。「放射能除去装置」を作ることは初めてですが、プロジェクトの中で一番肝心の装置ですので責任重大です。この装置が上手く機能すれば、ウクライナだけではなく福島でも使われることになると思います。

こちらの気候は曇天が多く、私の住む長野県よりも一ヶ月ほど早い秋が到来しています。朝夕は冷え込み、そろそろペチカでも焚きたくなる寒さです。しかし、夜空には星がたくさん出ており、飽きることがありません。

発酵というのはすごいことで、排出槽の中に入っても、いやなおいもしないの不思議です。

豊橋から 脱原発の新しい動き (橋本 京子)

22年11カ月間、一度も休むことなく発行し続けた月刊「浜岡―豊橋70Km」の終刊号275号が、購読者の元に届いたそのあくる日が3月11日でした。終刊してる場合じゃないとの声もありましたが、「反原発ネットワーク豊橋」を勇退後、20数年前毎週のように1号炉廃炉を訴えて浜岡に出かけていた得ちゃん(伊東得代さん)のお尻に火がつかしました。まず、「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映会をしようと言いました。3月後半に企画を立てて、4月早々に実行委員会立ち上げ。メンバーは、彼女がメールで原発危機を訴えた友人たち、つれあいさんがやっているミュージックカフェにやってくる若い人たち、そして「反原発ネットワーク豊橋」のおじさん、おばさん(私のこと)。会場は、4年前私と友人で「六ヶ所村ラブソディー」をやった、市民文化会館のリハーサル室(160人のキャパ)。5月15日が空いていました。「ミツバチ…」は鎌仲監督の最新作(2010年)で、3月11日以後、自主上映をするところが急増しましたが、4月5月は東海地方は豊橋だけでしたので、他県からの問い合わせは40件を超えました。そして当日、午前・午後・夜の3回上映で参加者はのべ540名以上、立ち見も出ました。映画と映画の間には、愛知大学教授の田中良明さんが、経済学者の立場から解りやすいお話をしてくれました。アンケートも120枚以上ありました。鎌仲監督による「核3部作」の、あと2作「ヒバクシャ」「六ヶ所村ラブソディー」も、9月10月連続上映が決定。9月4日の「ヒバクシャ」では、河田さんがお話をしてくれました。河田さんには、は別の若者の企画「原子力発電連続勉強会」に4回も来てもらい、豊橋は贅沢だと言われました。10月9日「六ヶ所村…」には、鎌仲監督のお話が聞けます。そして、私達は「さよなら原発東三河ネットワーク」として、9月19日のパレードに手作りの横断幕を持ってデビューしました。

小さなお話し…その後 (小牧 崇)

春以来、学習会でチェルノブイリのお話をする機会が増えました。その中で必ず触れている話題を三つ紹介します。

牛…ナロジチは、北海道よりも北に位置し冷涼であるため、牛の放牧も盛んである。セレッツ村のメインストリートを開歩する写真(原さん撮影)を見ていただきながら、「一日、村の共同放牧場で過ごした牛たちは、夕方になると自分たちで家に戻っていきます」と説明すると、「ほお〜」と感嘆の声が上がる。すかさず、資料(ナロジチ地区の食品汚染)を示し、事故直後は牛乳の汚染が酷かったこと、支援物資として日本の粉ミルクを送り喜ばれたことにふれている。

蜜蜂…年若い養蜂家から聞いた話…「まだゴルバチョフの声明も出ていなかった事故直後、春から花が咲いて蜂が活発に活動する時期なのに、朝庭に出て巣箱に近づいても蜂の羽音がしない。病気にもなったかと心配したが、7日ぐらいたってやっと普通に帰った。」8年前、アレクシエーヴィチ講演会でお聞きしたこのエピソードは、事故直後の様相と放射性ヨウ素の特性を知る上で見逃せない。

消防士…「昨秋、ウィーンで開催されたチェルノブイリフォーラムでの報告によれば、惨事による被曝の直接の影響で亡くなったケースは、50人にも満たないということになっています。しかし、事故処理作業を行ったジトーミルの消防士289人のうち、45名はすでに亡くなり、67人は障害者になっています。」5年前、ジトーミルで開かれた20周年祈念集会における、チュマクさんのスピーチの一部。事故処理作業には80万人を超す若者が動員された。作業時に受けた被曝の影響で亡くなられた方は、フォーラム報告の1000倍を超していると思われます。



夕方になり、共同放牧場から自宅に帰る牛たち
(ナロジチにて)

特集!! これからの福島支援 (神谷俊尚)



3月11日から半年以上が過ぎました。福島第1原発震災による汚染被害は、事故当初の外部被曝に対する懸念から、野菜類や牛乳・肉牛・海産物等の汚染が表面化し、内部被曝への対策を考えざるを得なく、長期に渡り放射能汚染と向き合わざるを得なくなりました。私たちチェル救は、4月～5月に「シーベルト測定隊」を結成し、南相馬市の汚染マップを作成することから行動を始めました。と同時に、既に活発な活動始めていた「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」と共同で、生活被曝線量の調査（個人単位で、24時間放射能測定器を身につけ、生活形態毎の被曝線量を知る）活動も行ってきました。この半年間の経緯を振り返りながら、今後の抱負を記したいと思います。

この間は、① 河田昌東・小牧崇を軸にした講演活動（述べ80回以上）、② 南相馬市（原町区・鹿島区・太田区）で汚染マップの作成・公表、③ 福島市・南相馬市で「土壌の除染」「生活被曝線量」の調査開始、④ 南相馬市での食品測定所設置への始動…これらが6ヶ月間の主だった活動です。福島県内の多くの場所で、政府系機関・大学・研究機関・各NPO・市民組織・農業者組織が、各種の実験実証作業を行っており、その情報量の多さに圧倒される現状です。

これからのチェル救は、汚染マップの測定作業などで知り合った市民の皆様とともに、②③④そして、⑤ 生活地域の除染活動ができる「市民中心の運動体」結成への取り組みを進めることです。

福島現地では、8月3日の発表会を含め、5回に渡り討論を重ねてきました。その間、③ 福島市・南相馬市における「生活被曝線量」の調査は、福島は7月中旬、南相馬市は8月上旬から開始しました。10月上旬には1回目の測定報告書を作成し、公表する予定です。

② **汚染マップ**：10月後半と11月初旬に測定作業を行い、第2回目のマップを発表します。

今回もチェル救・現地ボランティア 約30名に参加していただきます。第1回目と同様に、500mメッシュで約600地点の測定を行い、市民が自らの生活圏内の汚染度合いを、一目で判断できるようになっています。

④ **南相馬市での食品測定所設置**：内部被曝を避けるために、多くの方からその必要性を訴えられました。市内では、市民が安価に手軽に測定できる場所は、現在ありません。議論を積み重ねた結果、「市民による市民のための測定所」の必要性を痛感し、測定所設置に向けて機器の発注を行いました。設置予定の1月までに、市民（ボランティア中心）の測定体制を立ち上げなければなりません。

⑤ **生活領域の除染活動**：政府・行政は、除染に対する取り組みとして、学校の校庭・公園等の土壌剥離等を公共事業として始めましたが、市街地や個人宅に関しては、町内会単位で「高圧洗浄機」等の備品購入に対し、50万円の補助金供与をするだけであり、全く無責任な態度で始終しています。民間組織が、個人宅等の除染に向けて動きつつあります。しかし、個人宅の除染活動は、建築環境が異なっていて、統一的な活動ができず、困難な局面に直面しています。また、市街地の除染は、地域全体で取り組まなければ効果が得られません。

このような現実の中で、南相馬市でも多くの市民が「食品測定」「生活線量測定」「除染活動」等への関心を高めつつあります。また、各ボランティア・NPOとの間で、今後の活動をコラボして行こうとの話し合いも継続できつつあり、ようやくその形が見えてきています。

私たちチェル救は、市民中心の運動体作りをしっかりと支え、独り歩きできるまでともに歩いていく覚悟で、今南相馬市に関わっています。その種が芽生え始めました。

市民中心の運動体は、10/9に「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」から講師を招いて準備会を行い、11/5には河田昌東さんの講演会を企画して、正式に発足する準備に入りました。歩みは遅くとも、必ず南相馬市で太い幹となるよう期待を込めて…。

福島訪問記

(市原 佳代)

9月23日～25日の2泊3日で、神谷さん・池田さん・神野夫妻とともに南相馬市へ行ってきました。主な目的は、24日に行われる南相馬の方たち(測定隊の方や会議の参加者など)との交流会に参加することです。私にとって初めての南相馬、というより初めての東北は、空が青ければ青いほど、風が爽やかであればあるほど、原発事故のむごさが際立ってしまうのでした。

23日朝、名古屋ICを出発してから7時間後、郡山市近くの船引三春ICで高速を降りました。通り抜けた飯館村は、「全村避難」で人影はなく、荒れ果てた田畑にススキがはかなく揺れていました。

南相馬市に入り、避難区域20キロ圏内の境界まで行ってみると、監視のパトカーが待機しており、その先は立ち入り禁止区域。チェルノブイリの30キロゾーンと同じです。この狭い日本の国土に、広大な汚染地ができてしまったことを、改めて思い知らされました。

その後、到着したチェル救定宿「松の湯旅館」の玄関には、一番目につく場所に「ヨン様のポスター」(ファンなのですぐに目に入りました)、2番目の場所に、チェル救の作った「放射線マップ」が貼ってありました。その夜は、今後の南相馬での活動に欠かせないキーマンお二人、高橋さんと新川さんを囲んでの夕食会。お二人の事故への思い、南相馬の現状、そして復興への意気込みをうかがい、私はその時から「南相馬→原発事故→放射能汚染→住民被災」という図式を、「南相馬→原発事故→市民奮起→笑顔で復興」というフローチャートに置き換えることにしました。



<雑草の生い茂る水田に残されたままの船>

24日の午前中は海岸沿いまで行き、津波の猛威を目の当たりにしました。9メートルの津波が押し寄せた相馬漁港の建物の屋根は跡形もなく、休耕地となってしまった水田には雑草が生い茂り、漁船が横たわっている。その光景を間近で見ていると、メディアで二次的に見るのとはまったく違う恐怖感が生じました。

午後からは交流会が行われましたが、神野美知江さんと私は急ぎよ、南相馬市有機農業推進協議会主催の意見交換会に潜入することになり、交流会には参加できませんでしたが、その夜に繰り広げられた飲み会において、深〜く交流。空き瓶が増えるたびにお互いの距離は狭まり、本音トークとなり、理解しあえるのです。

不謹慎!? いえ、いつものチェル救スタイルです…。

そこでお知らせです。

来る10月22日・23日、名古屋市栄のオアシス21およびもちの木広場で開催される「ワールド・コラボ・フェスタ」に、南相馬市で活動中のNPO・市民組織が参加します。

市民団体「福好再見」のTシャツや、福島産の梨の販売も行います。南相馬の心意気が炸裂すること間違いなし!

今、福島で何が起きているのかを、そして何を目標しているのかを、彼らから直接聞けるまたとないチャンスです。

また、食品放射能測定器購入代金(約320万円)・研修、測定場所・事務所の立ち上げ、専従者の給与…等々、かなりの資金が急務です。皆様方のカンパをぜひともよろしくお願いします。



<20Km 圏内立ち入り禁止>



<食品測定センターが設置される予定の「福好再見」事務所にて>

南相馬からのメッセージ



今回の東日本大震災、また原子力災害に直面しての想いを書きたいと思
います。

立って居られない程の激しい揺れ、凶暴な牙をむいて迫って来る津波、
想像を遙かに超える出来事を前に、現実として受け入れられるまでかなり
の時間が必要でした。そしてようやく我に返ったときに、追い打ちをかけ
るように原子力発電所の爆発・・・まさに悪夢でした。当てのない辛く長い
避難生活を送るもの、恐怖と不安の中、家に閉じこもる事しかできないも
の、家族と離ればなれになるもの、職も失い生活も失い、皆途方に暮れて
いました。そんな中、いち早く駆けつけてくれた自衛隊を見た時、とても
ホッとしました。

その後の日本全国、世界各地からの救援物資、支援物資、汗を流して得
た貴重なお金を義捐金として送っていただき、私たちは生き延びる事がで
きました。皆さんのこれ程までに暖かい心にふれて、うれしさと感謝の想いで涙をこらえる事ができませ
んでした。あの震災から、7 か月が過ぎようとしています。もう十分に涙を流しました。これからは、
東北人の底力を存分に発揮する時です。政府や東電は当てになりません、市民が力を合わせ、自分達の事
は自分達でやるんだと、立ち上がり行動しようとしています。しかし、ここで一つ問題が・・・。東北の人々
は、平和な自然の中で生活してきました、放射能に汚染されたこの街でどう暮らし、何と戦わなければい
けないのか、どう戦えば良いのか、知識が少ないのです。これからは、皆さんの知識と知恵を支援してい
ただければありがたいと思います。復興も、政府や東電との戦いも、まだ始まったばかり。これから長い
時間が掛かります。でも、諦める事があってはなりません。子ども達、そしてこれから生まれて来る子ど
も達に、素晴らしい日本を残してあげるのは、私たち大人の義務です。最後に、皆様からの暖かい支援・
応援に、心から感謝します。
(福島県南相馬市 高橋 慶)

* * * * * * * * * * * *

現在、被災地の復興が始まっている様にメディアでは流していますが、
ここ福島では、復興どころか震災が終わっておりません。福島出身の私は、
「3・11 東日本大震災」の時、東京に居りました。日々、震災の悲惨さ・
深刻さをマスコミは流し続けました。じっとしてられず、Twitter で知
り合った個人ボラのチームやチェルQに参加させてもらい、宮城・福島を
メインに、毎週末ボラとして現地入りを重ねました。毎回、東京への帰路
時、虚しさや悔しさ等のモヤモヤしたものが残る...宮城と福島、同じ様な
風景なのに何かが違う。

復興に向けての気持ちが全く異なっていた。宮城では、震災（津波）で
給食センターが流され、「給食がパンと牛乳だけ・・・。お腹空いたあ」と
BBQ に駆け寄ってきて、屈託なく笑う子ども達がたくさんいた。そんな
子ども達を見守る大人達も優しい笑顔だった。福島では、原発事故の影響
でかなりの人達が避難をしていて、残っているのは、高齢者と未だに家族
を探している方や諦めて残っている方など、子ども達の笑い声が聞こえる事はありませんでした。残って
いる子ども達は、外へは出ず室内に閉じ込もっていました。そんな状況に子どもをおいている大人達は、
困惑と虚しさで元気のない笑顔でした。2~3 ヶ月前まではそんな感じで、どうにか南相馬を元気にでき
ないものかと悩み続けました。地元に戻り、南相馬市民として何か少しでも役に立てればと決意をし、戻
ってきたのです。原発事故により憔悴しきったこの南相馬。福島、南相馬が加害者ではないのです。毎日、
低線量の放射線を浴びつつ、普通に生活している原発事故の被害者なんです。農作物は作れず、畜産もす
べて汚染させられた被害者なんです。風評被害で加害者にされ、希望をなくしかけています。復興の足掛



かりを見つけないのです。

どうか忘れないでください。原発事故はまだ続いています。原発から希望は生まれない事を、それでも少しの希望を持って頑張り続けている南相馬市民がいる事を...Remember 3・11 Remember 南相馬
(「ダンブ新川」こと 新川幸枝)

* * * * *



メッセージと言われて、最初に思いつく言葉は「想像してほしい」です。津波の被害があったことを。家族や知り合いを目の前で亡くす現実を。原発事故でとてつもない恐怖にさらされ、街が放射能に汚染された現実を。漁ができず、畑を耕す事ができず、諦めることしか選択肢がないような現実を。地元民でさえ、福島産が安心して食べられない現実を。子どもと避難したくても、仕事の関係上や親の面倒見で、地元を離れることができない状況を。今までの生活がある日突然できなくなり、急に出口への光がまったく見えないトンネルに迷い込んだような、これから10年20年と続くであろう「放射能」という言葉や現実と、ともに暮らして行く私たちを…。

3月11日の震災から、人生で初めて放射能というものに不安になり、いつ原発が爆発するのだろうか、爆発の映像が流れるたびに胸が張り裂けそうなくらい鼓動が激しくなりました。そして離れて行く仲間たち、取り残される街と住民。あのころは、県外に避難したとき、「自分が南相馬から来た」と他人に言うのが恐かったです。テレビで、県外へ避難した福島県民が「放射能を持ってくるな」と迫害や差別されるという現実があったから。もちろん、優しく迎え入れてくれる方達もいらっしゃいました。しかし、そのことは今でも私たちの心の中にトラウマとして残っています。

半年がたち、半分以下に減っていた市の人口は、半分以上くらいに戻り、ようやく大型電気店が再開するなど、徐々にですが、街の状態は少しずつ戻りつつあります。

みんな自分の街にいたいから、前向いて必死に頑張っています。だから、私たちに「頑張れ」という言葉はいらぬのです。それは、私たちの現実が「可哀そうだけど頑張てね」という言葉になっているから。私たちは、今回の震災でたくさんの言葉に騙され、傷つきました。今では、それすら飲み込んで頑張っています。だから「応援」して欲しいのです。その気持ちは、私たちに活力を与えますから。

(「福好再見」代表 西野貴守)

「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」が本になりました！

—「チェルノブイリの菜の花畑から」創森社刊:定価 1600 円—

2007年から始まった菜の花プロジェクトは、来年3月で5年目を迎え、一応の区切りになります。

今後、5年間の成果をまとめて、ウクライナと日本で報告書をつくりませんが、この間のポレーシェの記事を集めて、一足早く本にしました。ウクライナでの経験が福島でも生かせたら…との願いからです。

今後、汚染地域での農業復興がどのようになるかはわかりませんが、私たちの経験を多くの被災地の人々に知ってもらい、お役に立てたら幸いです。

起こってしまった放射能汚染の中で、どう生きてゆくの、ウクライナも日本も違いはありません。



*本屋さんでお求めいただくか、チェルノブイリ救援・中部 事務所まで (送料込みで 2,000 円/冊)。

福島原発震災から6ヶ月が過ぎた。放射能汚染は未だに何ら解決せず、故郷を離れ避難している人々の行く末も定かでない。政府や国会はいたずらに時間を空費し、汚染地域の復興に対する確たる方針を打ち出せないでいる。そればかりか、我が国の首相は、国内では脱原発を唱えながら、国連の場ではあたかも原発推進であるかのような演説で国民と国際社会を愚弄し、福島事故原因も解明できない段階で、早くも休止原発の再稼働を云々している。休止原発再稼働の条件として菅前首相が打ち出した「ストレステスト」は、原子力安全保安院によれば、その結果次第で再稼働するかどうかを決めるわけではなく、国民に安全・安心を与えるためのテストだと言う。全く国民を馬鹿にしている。福島の実現を目の当たりにし、脱原発への期待を強くする国民とは裏腹に、政治の世界では早くも原発回帰への画策が始まっているようだ。

● 放射能汚染列島化を進める政府

福島原発から放出された大量の放射能は、今、全国にばら撒かれ、国土全体を汚染列島化する危険が進行中である。それを進めるのは政府である。環境省は6月16日、1Kg当り10万ベクレル(Bq)以下の放射性セシウムを含む汚泥や焼却灰は、産廃最終処分場に埋め立てても良い、と打ち出したが、9月25日になり、その上限を撤廃し、10万Bq以上でも埋め立て可能とした。これで事実上、上限はなくなった。こうした方針は、環境省のいわゆる「有識者懇談会」なる学者達が後押ししてできたものである。今後、自治体が認めれば全国何処でも強烈に汚染した汚泥や、焼却灰の埋め立てが可能になる。一方、農水省は6月24日、下水処理場で発生した汚染汚泥を、1Kg当り200Bq以下なら肥料として利用しても良い、との方針を打ち出した。これまで下水汚泥は、各自治体が肥料化して農家に無料配布するケースが多く、民間業者が販売する分も含めれば、年間130万トンを超えるという。既に下水処理場の汚泥から高濃度の放射性セシウムを検出した自治体は、岩手・宮城・山形・福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨・長野・静岡など14都県に及び。こうして、高濃度の汚泥や焼却灰は産廃として埋め立てられ、低濃度の汚泥は肥料として全国に流通される。

● 処分場から汚染廃水

既に問題も出ている。群馬県伊勢崎市は環境省の勧めで、1Kg当り8,000Bq以下(実際には1,810Bq)の放射性セシウムを含む焼却灰を産廃処分場に1日当り10トン受け入れてきたが、9月12日、処分場から沁みだした汚水

に、Kg当り223Bqの放射性セシウムが検出され、水で薄めて流す放流水にも149Bqが検出された。これはKg当りセシウム137が90Bqという原発の廃水基準を大きく超える。既に、汚染の全国化は始まっているのである。9月9日、横浜市はKg当り2,442Bqの汚染汚泥で海面埋め立てを行なおうとして、市民の強い反対にあい事業を中断している。

自治体は、何故これら放射性セシウムの発生源者である東京電力に、汚染汚泥を返納しないのか。かつて、三重県四日市市の石原産業(株)は、製品の酸化チタン製造の副産物であるフェロシルト(天然放射能トリウムを数百Bq含む)を東海地方各地の産廃処分場に埋め立て、自治体の反対にあって数十万トンを全て回収させられた上、副工場長は刑事責任を問われて有罪判決を受け収監された。今回の場合、汚染規模が大きくなっただけで責任企業を国が手助けし、汚染をばら撒いている。大学や病院で年間5ミリシーベルトを超える場所は、「放射線管理区域」として一般人は立ち入り制限されるが、福島県各地の放射線濃度はこれをはるかに超える。福島原発震災によって、この国の法律は全く機能しなくなっているのである。

● 国民の声が反映できる政治を

この国の政治は、国民の意図とは大きくかけ離れている。産業界や原子力村の住民達の意向を伺い、自らの明日の身を案ずる政治家で満ち溢れている。国会の論戦も揚げ足取りに終始し、福島後の国家が議論されることはない。一刻も早く政治を改革し、新たな世界の構築に向けた議論を始めなければならない。(河田)

竹内さんのウクライナ便り

8月に逮捕・勾留されたティモシェンコ前首相の裁判が行われている裁判所のそば、キエフ市内のメイン・ストリートの歩道では、同氏が代表である政党の抗議行動テントが並び、それに隣接して、同氏を批判する勢力のテントが固まり、それらを警戒する機動隊員（内務省特殊部隊員）が一定の距離を置いて立ち番をしている状態が続いています。この裁判に関しては、前回書きましたように、最大の政敵に対する現政権からの不当な圧力であるとする欧米からの非難が高まっており、EU との連合協定締結と自由貿易圏設立を希望しているウクライナとしては、その意向を無視できないところ。もっとも、EU の批判の真の理由は、「ティモシェンコ氏がロシアと結んだガス価格協定が、EU にとって有利なものであり、それがウクライナの国益を損うとして起こされたこの裁判で氏が敗訴すれば、EU の利益を損うことになるからだ」という説もあります。

いずれにせよ、9月15日から2週間にわたり裁判が中断されたのは、現政権がなんとか己の面子を損なわない形でティモシェンコ氏を無罪放免する方策を捻り出そうとしているのでは？ とも取り沙汰されていました。しかし9月27日、検察側は同氏に7年の禁固、その後3年間公職に就く権利を剥奪するという刑を要求。同日ヤヌコーヴィチ大統領は、「経済活動に関する法律違反に対しては、禁固刑を廃止する」という趣旨の法改正案を最高会議に提出。「禁固刑は指定される罰金を支払わない場合のみ、裁判所の決定により行われる」という内容の改正は、つまりティモシェンコ氏を有罪にはするものの禁固刑にはしない、という形でEUとの妥協を図るためのものではないかとも考えられます。この日、裁判所の前でピケを張っていた同氏の支持者ら約300名が、裁判所から拘置所へ同氏を護送する車の行く手を塞ぎ、上記特殊部隊により催涙ガスを撒かれ、退散させられるという騒ぎがありました。

一方9月20日には、3,000人以上が最高会議議事堂前に集まり、「16の範疇の国民について、彼らが現在受けている社会保障の項目を

削減する」という法案が前日可決されたことに対する抗議を行ったそうですが、その中には、アフガン帰還兵他の軍事行動参加者のほか、チェルノブイリ被災者も含まれていた由。ちょうどその1週間ほど前、広島大学の方々がプリピャチからの移住者の聞き取り調査と健康相談を行い、その通訳をした際に聞いたのですが、現在彼らに残された保障のうち、かろうじて実施されている、公共料金の半額免除・市内公共交通の免除なども、廃止が見込まれているということでした。複数の疾病を抱え、医療も実質全額負担、わずかな年金での生活を余儀なくされている被災者らにとっては厳しい措置です。健康相談をされた一人、キエフ市内の公立病院で血液透析を受けている40代の女性によれば、透析を受けるにあたって、消耗品の代金はすべて自己負担。障害者年金の多くがそれに消えるばかりでなく、透析装置のフィルターを患者ごとに交換しているわけではないため、血中のカリウムやリンの値が上がってしまうとのことで、相談を受けた血液内科の先生はショックを受けておられました。聞き取り調査の後、福島原発事故後避難を余儀なくされた周辺住民の現状を、他人事でなく心配しているプリピャチからの移住者たちの質問（移住先で住居の提供はあるのか、仕事は保障されるのか、など）に、広島大の方たちが詳しく答えておられました。「事故後、プリピャチに戻れるのか戻れないのか、身の振り方が決まらなかった時期が一番辛かった。福島の方々も同じだろう」というのが彼らの一致した意見です。（9月28日）



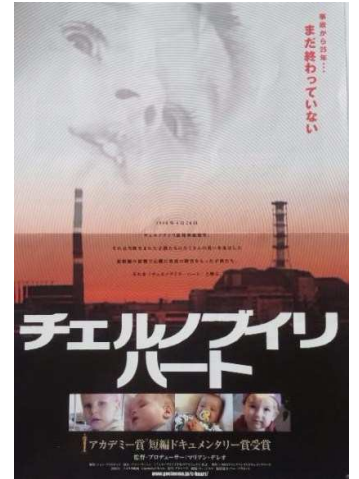
<ゆっくりと放射性物質入りの廃液が流れるように、堰き止め板を12枚入れた「放射能除去装置」作り。プロジェクトの中で一番肝心な装置ですから、責任重大です。（ラスキにて 2011.9.30）>

事務局便り

今年の夏は本当に暑さが厳しく、人間だけでなくパソコンもヒューヒュー言いながらこの2カ月を過ごしました。事務局のメインPCが故障するという事態もなんとか切り抜け、ようやく涼しくなり、過ごしやすくなりました。そろそろ事務所の大きな蚊ともサヨナラできるでしょうか…。さてもう10月。気がつけば、チェル救で働き始めてあっという間に半年が経ちました。早かったー。もうすぐ中間報告&助成金報告の時期です。初めての大事な！ しっかり頑張らねば！ そして、今年もXmasカードキャンペーンが始まります。今年は残念ながらNたま生がおらず…キャンペーン担当者どうなる!? と心配していましたが、名古屋NGOセンターからの強力な助っ人3名が、担当者としてキャンペーンを進めてくださることとなりました！ その他、HP作成の頼もしい助っ人も。更新がなかなかできずにはいますが、ただ今リニューアル中ですので完成まで楽しみに！ (兼松)

名古屋市近郊の方へ ロードショーのお知らせ!!

ドキュメンタリー映画「**チェルノブイリ・ハート**」＝解説＝
1986年4月26日チェルノブイリ原発事故が発生しました。
その事故から16年後の2002年、ベラルーシ共和国…。
「ホット・ゾーン」の村に住み続ける住民、放射能の現場、小児病棟、
乳児院…。この映画は、今なお続く被爆被害の事実を追った渾身のドキュメンタリー作品です。また、この作品は『2003年アカデミー賞短編ドキュメンタリー賞』を受賞しています。
【監督・プロデューサー】マリアン・テレオ
【協力】アディ・ロッシュ「チェルノブイリ子どものプロジェクト」代表
【配給】ゴー・シネマ 2003年/アメリカ映画/61分



©2003 ダウンタウンTV ドキュメンタリーズ

10月15日(土)より 緊急ロードショー!
上映場所:「名演小劇場」(錦通東新町・中電ビル東 052-931-1701)

<ポレーシェ読者には、割引優待があります!>

名演小劇場様のご厚意で「チェルノブイリ・ハート」上映期間中に、「ポレーシェ 125号」を劇場スタッフにお見せすると、同時入場3名まで下記料金にて割引していただけます。

割引内容: 当日料金: 一般・高大生 1,300円のところ、1,000円

当日料金: 小・中・シニアの方は、1,000円均一 (割引はありません)

お断り: 本作品は【PG12】に指定されています。12歳未満の方の鑑賞には、成人保護者の同伴が必要です。

編集後記

☆今回の福島訪問ではうっかりしており、福島名産「凍みもち」にお目見えしていない。次回は必ずGETし、浜通り産のお酒と味わいたいものだ。(佳)

☆25年前のチェルノブイリ原発事故、チェル救の活動、菜の花プロジェクトの実験経過、福島支援のこと…私たちの足跡が直ちに学べる「チェルノブイリの菜の花畑から(p9)」。ぜひお手元に一冊。(美)

☆首相や大臣が、「年内にも『冷温停止』を達成する」と、国際舞台で表明した。燃料棒がメルトダウンやメルトスルーをして、压力容器から紛失してしまったと言われている今、『冷温停止』にどんな意味があると言うのか? これは、核燃料の存在すら無視して、安全・安心を語る茶番劇である。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473